

明日死ぬとしても、

今日花に水をやる

樋野興夫著

いい覚悟で生きるより

運命を受け入れる。でも、運命に翻弄されないで  
毅然と生きる努力を続けましょう。

「もし明日世界が終わるとしても、私は今日りんごの木を植えるだろう」と言ったのは、ドイツの神学者で牧師のマルティン・ルターです。宗教改革の中心人物として教科書で習ったことがあるでしょう。

明日で世界が終わってしまうということは、今日リンゴの木を植えても実りを得ることはできません。それどころか、木自体もなくなってしまうでしょう。木を植えるその人の存在も、木を植えた大地も一切がなくなってしまう。人類の歴史でさえ、失われてしまうのです。

となると、残された今日一日は、刹那的に享樂の限りに過ごすのか、おびえて悲しみ嘆くのか、運命を罵倒するのか、あるいは祈るか、でしょうか。

それなのにルターは、今日リンゴの木を植えようと言うのです。それが、人間としてもっとも尊く、また人間らしい生き方だからにほかなりません。

この言葉自体は小学生でも理解できるでしょう。けれども、その真意を理解することは、きわめてむずかしいと思います。この言葉は、行為について語ったものではありません。明日、世界が終わるなら、何をするか？ これは、行為でなく心の在り方を問う言葉だからです。

この問われていることを私は、苦難の現実には誰にも起きるけれど他者に関心を持つ、持ち続けることで尊い贈り物を遺すことができる、と理解しています。

ある日の面談で、強い孤独感を訴える患者さんがいました。

「がんになってから、周りの人がみんな急によそよそしくなって、私を避けているんです。地域活動や趣味の習い事を一緒に頑張ってきた仲間と思っていたのに、冷たいじゃありませんか。先生、がんになったのは私のせいじゃありませんよね。私はなんでがんになったのでしょうか」

リーダー格として活動を盛り立ててきた自負がある分、ショックも大きかったようです。

自分の殻に閉じこもってしまったような患者さんに、私は言いました。

「あなたは、明日死ぬとしても、今日花に水をやりますか？」

「え？ そんなことしませんよ。だって、私はその花をもう見ることはできませんよね」

「でも、あなたが水をやらなければ、その花はそのまま枯れてしまうとしたらどうでしょう」

考え込みながら、枯れてしまった花を想像したのでしょうか。意を決したように言いました。

「先生、やります。たとえ、明日死ぬとしても、水をやります」

その花は、患者さんの周囲の人と同じです。「がんになった自分」だけにせいいっぱいになると、花に水をやる余裕がなくなることもあるでしょう。見て見ぬふりをすることもあるでしょう。周りの人が離れて行くと感じているのは、きっと自分の風貌が周囲と距離を置いているからです。患者さんの気持ちこそが周囲に向いていないのです。

自分ががんになったことを隠したい人もいます。知られたくない気持ちから過敏になって、周りの人を無意識に遠ざけていることに気づきません。周りから見ると、逆にこの人が急によそよそしくなって、何かあったのではと感じるのです。それを周りの人が離れていくように感じることもあるようです。

「花に毎日水をやるように、あなたが周りの人のことを忘れず、慈しむように 接するなら、たとえあなたが明日いなくなっても、あなたのことを 5 年先、10 年先に思い出す人がいますよ。あなたのその生き方そのものが、周りの人への贈り物になるのですから」

「明日死ぬとしても、今日花に水をやる」は、お察しのとおり、「明日世界が 終わるとしても、今日りんごの木を植える」をもっと身近にしたものです。

りんごの木を植えるためには、場所も力も必要ですが、花に水をやることなら、誰にでも簡単にできるはずで  
す。実際に、末期がんの患者さんで寝たきりであるにもかかわらず、ベッドを抜け出し、家の中をはって行って、鉢植えの植物に水をやっているという人がいます。家族は、花に水をやる使命を全うしている姿に、なんともいいがたいほほえましさと勇気を感じている、と話してくれました。

この患者さんの行為、そして、水を与えられた鉢植えは、たとえこの患者さんがなくなったあとも、かけがえのない思い出とともに、家族への贈り物として残されることでしょう。そうして、あなたが育てた花を、思いを、必ずや 誰かが引き継いで育てるはずで

